

## 創立60周年記念号発刊にあたって



社長 内海 勝彦  
Katsuhiko Utsumi

弊社は、昨年9月1日をもって創立60周年を迎えることができました。昭和25年に古河電工の電池部門が独立し、古河電池として創立以来、幾多の困難を乗り越えて今日を迎えることができましたことは、関係各位の長きに渡るご支援と従業員の努力の賜物と、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は、5年前に社長に就任した際、「会社の継続的発展」と「株主、従業員をはじめとするステークホルダーに対する利益の還元」が使命であると宣言し、「小さくてもきらりと光る企業」を目指して、この5年間専心努力して参りました。この間、お蔭様で業績も向上し、リーマンショックによる経済危機に直面しつつも、一昨年より復配に転じることができました。これは偏に皆様方のご支援の賜物であるとともに、従業員が一丸となって「変化」に対応できたことも大きな要因であったと考えております。「生き残るものは、最も変化に対応できるものである。」というダーウィンの言葉は、企業の存続にも当てはまるものと思います。今後も、如何なる環境の変化に対しても、柔軟に対応できる企業体質を維持し、厳しい経営環境を乗り切っていく所存です。

さて今年度は、60周年を祝うが如く、惑星探査衛星「はやぶさ」が宇宙での7年間に及ぶ任務を終え、奇跡的な地球帰還を果たしました。この「はや

ぶさ」には、弊社が開発した世界初の衛星用リチウムイオン電池が搭載されており、内外に広くアピールできたことは、弊社にとって大きな喜びであるとともに、誇りでもあります。技術開発には長い期間を要し、大きな苦しみがありますが、このような成果の果実を味わえる醍醐味があり、その喜びを全社で共有できる楽しみがあります。今後もこのような成果を出し続けられるよう、技術開発の推進に努めて参りたいと考えております。

10年前、本誌創立50周年記念号で当時の今井社長が奇しくも次のように述べております。まず自動車については省エネに向けた様々な努力が重要となり、また電力・エネルギー技術では太陽光や風力エネルギーの有効利用とそれによる電源の分散化が進むため、弊社としては電池を使ったエネルギーの「パワーアシスト」、「回生」、「貯蔵」に向けた技術開発に最優先で取り組んでいくと。当時蒔かれた種が、10年の時を経て、今まさに大きく成長しようとしております。自動車に関しては、ISS用電池やウルトラバッテリーの開発が進み、産業用に関しては、今年、NEDO（独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構）のプロジェクトである「蓄電複合システム化技術開発」に採択が決まり、北九州市と京都市「けいはんな」の2地域で、弊社ウルトラバッテリーとリチウムイオン電池を使用した日本版

# 社長挨拶

---

## 創立 60 周年記念号発刊にあたって

スマートグリッド実証試験が開始されることになりました。技術開発にはこのように遠い将来を見据えた戦略が重要であると考えます。その意味でも、創立 60 周年を前にして「2020 年長期ビジョン」を発表することができたことは、技術開発にとっても、大きな意義があったものと考えております。

永く栄えている企業の多くは、「オンリー 1」若しくは「ナンバー 1」の製品を持っております。そして、絶えずイノベーション続け、高い新製品化率を維持してこそ末永い企業の存続が約束されるものと確信しております。そのためには、技術開発が

重要であるということは言うまでもありません。弊社もウルトラバッテリーやリチウムイオン電池の開発など、現在の最先端の開発を継続するばかりではなく、さらにその先の技術、10 年後、20 年後の世界に必要とされるであろう「見えないテーマ」の発掘に努め、「オンリー 1」、「ナンバー 1」の製品を開発して参る所存です。

これからも、環境に配慮した企業活動を継続しつつ、積極的な技術開発に努め、社会に貢献できる存在感のある会社を目指して参りますので、引き続きご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。